

議会



西脇市議会議長
林 晴 信

「住民の意見を聞いていくのはわかるのですが、大きな声に左右されてしまう危険性があると思うのですが」という質問を視察や研修でいたたぐることがある。その場合の私の回答は決まっています、

「大きな声が多数の声か判断するために、も、さらに多くの住民の意見を聞く必要があるのです」と答えている。また「議会報告会を開催しても、参加者からは要望やクレームばかりなので、いつの間に行わなくなりました」との話を聞くこともあり、その場合は「住民が要望やクレームを言うのは当たり前です。要望やクレーム、さらに雑談の中からも課題を見つけ出して、政策に結びつけるのが議会の役目ではないのですか」と回答している。

視察や研修等を通じて感じることは、意外と議員は住民との対話が苦手で、支持者と話をすることはあっても、それ以外の住民との対話はあまりしないという場合が多い。それではなかなか住民から信頼される議会ではならないだろう。

議会は役所の出先機関ではない。時折、そのように勘違いしている住民もい

るが、それは議員がそのような活動に終始しているからではないだろうか。「行政とのパイプ役」を自任し、住民要望を担当課に伝えて回答をもらい、その回答を住民に伝えるだけ・・・これでは出先機関に見られて当然のことである。もちろん議員が住民要望を受けるのは自然なことだと思う。しかし、要望から課題を抽出して議会（委員会）での討議と意思決定が無ければ、議会の自殺行為ともいえる。議会不要論に繋がってしまうと考えている。

また出先機能的活動ばかりしていると、住民から行政に対する批判をまともに受けることになり、「そう言われても市の対応はこうなっているのだ」という行政の言葉を使ってタジタジになって弁明することになってしまう。これで

は、いったい議会はどこにあるのかという話になってしまいかねない。

西脇市議会でも議会報告会や住民との意見交換会では、参加者から色んな意見が出る。それが要望という形であったり、時には批判の声であったりもする。そのような声を全て「政策のタネ」と認識し、その中にある課題を抽出し、全体最適化させ、政策としていくことで、初めて議会の存在意義があると考えている。だから議会報告会の開催当日よりも、むしろその後が本番になる。会場担当班等段階ごとの討議と精査を経て、常任委員会でも所管事務化して課題解決に向かうスキームとなっている。

恐らく今でも議会報告会等を開催しているような議会では似たようなシステムにはなっていないかと思う。システム

は真似れば誰でもできる。肝心なのは、誰でもできることを誰でもできないくらい徹底して行わないと信頼や評価というものは得られないと感じている。

私はよく「議会」というのは住民自治のツール、道具なんです」と住民に話すとがある。続けて「だから使わないと錆びるばかりです。使い勝手がいいようにするのが議会改革。なので使ってください」と結んでいる。使えば愛着もわくし、信頼も生まれる。住民と乖離して議会は存在し得ない。常に意識すべきは「議会は住民の中にある」ということであり、住民福祉の増進のためにどう住民の声を反映した政策を作るか、その政策を作るためにはどういう制度が必要かを考えて行動していけば、議会改革なんて勝手に進んでいくことだろう。

議会は住民自治のプラットフォーム

議会は色んな目的を持った人が集い、多様な意見が行き交う場である。そして

そこから対話によって合意形成が導かれる場でなければならない。まさに議会は住民自治のプラットフォームとして機能しなければならないと考えている。議会報告会や課題懇談会、あるいは請願や陳情、そして議会モニターや政策モニター等色んなチャネルでの住民参画制度を充実させ、そして同時にその制度が住民にとってわかりやすく使いやすいものにしていくことで、よりよく機能していくようになるはずである。そして、それが主権者意識の醸成にもなり、住民自治の進展に繋がるのではないかと考えている。

いま一度、自分たちの議会は住民自治のプラットフォームになっているか考えてみる必要があるのではないか。議会改革の意義はたぶんそこにあるだろう。